

国際青年

2013年(平成25年)11月1日発行

第37号

埼玉国際青年を育てる会・会報

Saitama Association for International
Youth Volunteers

★平成 25 (2013) 年度壮行会

副知事も駆けつけ、隊員を激励

■ 2 次隊壮行会

平成 25 (2013) 年 9 月 24 日 (火)

さいたま商工会議所会館 1 階ホール

埼玉国際青年を育てる会 共催
青年海外協力隊埼玉県OB会

彼岸到来とともに記録的猛暑が去り、秋分の日
の翌日、もうすぐ任地に向かう隊員たちのために
壮行会が開催されました。シニア海外ボランティ
ア 5 人を含む計 17 人が、アジア、アフリカ、南
米ほか世界各地に派遣されます。

まず、埼玉国際青年を育てる会の星野和央会長
が主催者として挨拶、その中で当会は「行って
らっしゃい！」だけで済ませるのではなく、隊員
たちの体験を次の代のために役立てるべく語り継
ぐ役割があることを強調していました。



塩川副知事(左)と星野会長

来賓では埼玉県の塩川修副知事が初めて出席。
ご自身の希望で来られたということで、メッセー
ジには暖かい激励が込められ、埼玉でもグローバ
ルな人材が求められていると説きました。続い



て、JICA 青年海外協力隊事務局の松島正明審議
役がこの事業の意義を語り、帰国後の隊員の就職
についての配慮にも触れていました。

この後は隊員たちの自己紹介に入りました。派
遣先の国情、そしてそこで何をするのか、元気に
挨拶が続きました。5 人のシニア海外ボランティ
アからは、長い経験にもとづく蘊蓄も披露されま
した。

— 派遣先・職種は次のとおり —

- ・マーシャル諸島……日本語教育
- ・エクアドル……小学校教諭
- ・ニカラグア……感染症・エイズ対策
- ・エチオピア……コンピュータ技術
- ・モンゴル……看護師
- ・ " ……コミュニティ開発
- ・ " ……理学療法士
- ・ベトナム……環境教育
- ・セネガル……病虫害対策
- ・キルギス……野菜栽培
- ・ラオス……環境教育
- ・パラオ……環境教育

● 37 号 目次 ●	平成 25 (2013) 年度壮行会 ……………	1・2
	出前講座 ……………	2～4
	平成 25 (2013) 年度定期総会 ……………	4
	帰国隊員報告会 ……………	4・5

現地レポート ……………	5～12
小さなハートプロジェクト ……………	12
新会員のご紹介 ……………	12
お知らせ ……………	12

(シニア海外ボランティア)

- ・チュニジア ----- 料理
- ・パ ラ オ ----- 統計
- ・セルビア ----- 日本語教育
- ・チ リ ----- 卓球
- ・バヌアツ ----- 港湾



(山田 洋)

■ 1次隊壮行会

平成 25 (2013) 年 6 月 21 日 (金)

さいたま商工会議所会館 1 階ホール
埼玉国際青年を育てる会 共催
青年海外協力隊埼玉県OB会

外は今にも降り出しそうな梅雨空でしたが、出発を目前にした 15 人の隊員の門出を祝いました。シニア海外ボランティア経験者でもある当会の樋口副会長の挨拶を皮切りに、来賓者の温かいメッセージが続きました。JICA 地球ひろばの松島審議役は「協力隊事業 50 周年を再来年に控え、ますます事業をもりたてたい」、埼玉県国際課の秋山主幹は「隊員が日本に戻ってきたら、その経験を埼玉県のため、後輩たちのために役立ててほしい」、社団法人協力隊を育てる会の佐藤事業 2 課長は「帰ってきたら、ハイ終わりではなく!」と強調していました。



続いて派遣隊員たちの自己紹介があり、15 人 15 様の抱負を語ってくれました。明確な目的意識を口にする隊員が多く、帰国後の自分の役割を具体的に披露する人もいました。そんななか、派

遣先の言語での歌も飛び出し、緊張した会場がなごみました。最後に語ったシニア海外ボランティアの「年老いた両親を置いていくのは後ろ髪を引かれる思い」の一言は胸にしみました。

— 派遣先・職種は次のとおり —

- ・サ モ ア ----- 小学校教育
 - ・グアテマラ ----- 栄養士
 - ・ボンジュラス ----- 看護師 (2 名)
 - ・ニカラグア ----- 小学校教育
 - ・ウ ガ ン ダ ----- 理数科教師
 - ・ " ----- 体育
 - ・パ ナ マ ----- 環境教育
 - ・バヌアツ ----- 行政サービス
 - ・ " ----- 番組制作
 - ・ナミビア ----- PCインストラクター
 - ・ドミニカ ----- 経済・市場調査
- (シニア海外ボランティア)
- ・ペ ル ー ----- 理学療法士
- (日系社会青年ボランティア)
- ・パラグアイ ----- 日系日本語学校教師
 - ・ドミニカ ----- "



(山田 洋)



★出前講座

■ 武田実奈さん (青年海外協力隊 21 年度 1 次隊 ベナン 保健師)

昨年、さいたま市内の小学校での出前講座で好評だった武田さんが、今回は戸田市立芦原小学校に出向きました。8 月 25 日 (日)、夏休みで子供の姿はなく、聴衆は「埼玉県国際理解教育研究会」(4 ページ参照) 夏期研修会に出席の先生方。国際理解ということに取り組んでいる方々にとって、距離的にも文化的にも日本とはかけ離れたベナンという国の話には興味津々だったようです。今回は話の内容をより詳しく紹介します。

マラリアやコレラの猛威

大学病院で働いていましたが、患者に細やかなケアができず、悩んでいました。以前から村や島の地域医療に携わりたいと思っていて、友人から青年海外協力隊の話聞き、応募したのです。

派遣先のベナンは西アフリカの小国で、南側が海に面しています。かつてフランスの植民地だったこともあり公用語はフランス語ですが、46部族それぞれの言語が使用され、北と南では言葉が通じません。宗教はアフリカ伝統のブーゾー教のほか、キリスト教やイスラム教も入ってきています。特に宗教対立はなく、異教徒間の結婚もあります。

貧富の差が大きく、一夫多妻が許されているので、現地で知り合った有力者は3人の奥さんと30人の子供を持っていました。田舎では子供は働き手という考えもあり、子だくさんの傾向があります。都会のインテリ層の間では、女性の健康や教育費を考えて、子供は2、3人というのが普通になってきています。



初等教育は無料化されたものの、初等中等教育の習熟者が少なく、15歳の非識字率は依然高いです。小学1年からフランス語で授業が行われますが、家では現地語なのでフランス語習得が難しく、授業についていけない子も多いようです。日本の援助で学校も作られていますが、ハード面だけではしょうがないところがあります。先生たちの給料が半年間払われておらず、先生がストライキをして、長い間学校が休みという例もありました。

保健センターという診療所のような施設に配属されましたが、ここに来る人の半数がマラリア患者でした。特に1～5歳の子供の感染が多く、5歳未満の死亡率が非常に高くなっています。マラリアは蚊にさされて感染するので蚊帳の使用を奨めていますが、なかなか普及しません。寄付で受け取っても、それを売ってしまうのです。



また、生活用水に川の水を使うのでコレラも発生しやすいです。慢性的な下痢の人が多く、コレラでひどい下痢になっても下痢の意味がわからず、具体的に症状を説明しなければなりません。

貧しくても支えあって楽しく生きる

職場の同僚のベナン人にも驚くことばかりでした。1時間2時間の遅刻は当たり前。医療器具を滅菌するための容器に自分の食べ物を置いて暖めていたり。ベナン人の考えと自分の考えを統合することの難しさに悩みました。そうこうして、信頼関係を築くことが大切なので自分もベナンの文化を受け入れていこうと思うようになりました。

そう思うと、ベナンのよいところがいっぱい見えてきました。ある日、栄養失調で衰弱している子供が母親につれられて保健センターに来ました。点滴をしなければならないのですが、母親には残金がありません。私が払おうかとさえ思いましたが、外国人がそれをやったらきりがなくなります。その時、この話を聞いていた人が金を出してくれたのです。みんなが支えあっているというのが、この国の一番よかったところです。日本に比べて物資の乏しいベナンでも、みんな楽しく生きていて笑顔が絶えません。

ベナンの子供たちは私に「髪の毛はかつら？」とか「肌に塗っているのはどんなクリーム？」と聞いてきました。

まっすぐな髪や白い皮膚を知らなかったのです。世界中にはいろいろな人がいることを彼らに教えてあげるのも大切です。ベナンから日本に留学したり、現地で日本語を学ぶ人が増えています。

日本に帰ってからは新宿区で保健師として働いています。

親と子、子供同士の接触が少ないため、孤立している人たちが多いのに驚きます。貧しくても人と人が支えあうベナンを思い出さざるをえません。

「埼玉県国際理解教育研究会」とは

埼玉県において、国際理解教育並びに海外、帰国・外国人子女教育等の発展に寄与することを目的に、昭和52年に発足した任意団体です。(初代会長、故大野正雄先生)

会では、毎年、在外教育施設派遣教員の帰国報告会、歓迎会、総会(6月)、夏季研修会(8月)、冬季研修会(11月)、埼玉県国際理解教育研修会、壮行会(3月)等を主催するとともに、会報「さきたま」を発行しています。

会員の母体は、在外教育施設派遣教員(文科学派遣)等であり、毎年20～30名の埼玉県現職小

中学校教員が世界各国の日本人学校や補習授業校に派遣されています。

なお、現会長の小久保正雄先生(戸田東小学校長)は、育てる会の理事として両会の橋渡しをしていただいております。

HP <http://libsato.justhpbbs.jp/>

埼玉県が、公費で長期にわたって海外に人材を派遣する主な事業は、教育文化に関しては、在外教育施設派遣と青年海外協力隊・シニア派遣の2つです。今回の出前講座がきっかけとなり、両会が連携しあっていますます実り多き成果を得られることを期待しております。(小島章裕)

★平成25(2013)年度定期総会

平成25(2013)年5月25日(土)

国際交流基金 日本語国際センター

初夏を思わせるような五月晴れの午後、埼玉国際青年を育てる会定期総会が開催されました。大原薫前事務局長の司会で開会され、最初に、星野和央会長よりあいさつがありました。多くの方々にご参加いただき、おかげで当会の活動も大変中味の濃い活動となってきたと感謝が述べられ、また、壮行会や歓迎会などのこれまでの活動に加えて、皆様のご協力をいただきながら新しい試みを行っていききたいと今後の抱負が述べられました。また、総会議事では議案第1号から第5号までが審議され満場一致で承認され、今年度の活動がスタートしました。

来賓祝辞として、埼玉県国際課長の矢嶋行雄氏、社団法人協力隊を育てる会事務局長の奥永美

智子氏から、協力隊の意義についてのお話と隊員への期待と激励の言葉をいただきました。



総会後の懇親会は瀬島孟副会長の乾杯で始まり、井上泰一理事兼事務局長の司会で、和やかに楽しく行われ、会員同士の交流を深めました。

(中島美都里)

★帰国隊員報告会

総会后、3名の帰国隊員の報告会がありました。最初は青年海外協力隊平成20年度2次隊の藤木有美さんが、理数科教師として赴任したモンゴルでの活動を報告しました。モンゴルの食べ物や自然、また遊牧文化について写真をまじえて紹介しました。また、小学校4年生を受け持った学校の様子などを報告しました。理科の授業では、観察や実験を通して、できるだけ生徒自信が自分で考えるような「調べ学習」を心がけたそうです。生徒たちとの楽しそうな様子が写真で紹介されま

した。

次に、シニア海外ボランティア22年度2次隊の内海洋一さんがエチオピアでの活動を報告しました。エチオピアはアフリカの角といわれているそうです。興味深い歴史や文化について話されました。現在は、多くの民族が暮らし、人口も増え、水不足が問題になっているそうです。地盤沈下や資金など多くの問題を抱えているそうですが、豊富な経験を活かして水道局で活動された様子を沢山の写真を使って報告されました。



現地レポート

■富田真理子（鶴ヶ島市）

24年度2次隊 ベナン 村落開発普及員

ボンジュール！

わたしは、乾期に突入したばかりのあつ〜いベナン共和国で活動しています。ここに到着したのは3月末。時間が走るように半年が過ぎ去りました。

今日はわたしが大好きなベナンについて2つをご紹介します。



最後は青年海外協力隊15年度3次隊の福田笙子さんがウズベキスタンでの青年活動について報告されました。日本について知ってもらうだけでなく、折り紙を通じて学んでもらいたいと考え、折り紙教室や社会科見学などの活動を行なったそうです。そうした活動を通じて、家族の大切さや日本の良さなどを再確認されたそうです。

3名の帰国隊員は、貴重な活動報告を通して、文化や歴史は違っていても家族の大切さや社会の中での人間のつながりの大切さは共通していることを実感し、また日本のよさを再確認したと話していることが印象的でした。（中島美都里）



●会報「国際青年」に

原稿・写真の提供のお願い

会報「国際青年」を毎年5月および11月に発行しており、原稿を募集しています。

- ・派遣される方については、派遣先での活動の様子を原稿と写真でお寄せください。「現地レポート」として、掲載させていただきます。

原稿の字数は、タイトルを含め最大で800～400字、写真は2枚程度でお願いいたします。

なお、一言コメントでも結構です。

- ・留守家族の方も、家族の思いなどをメールやFAXで寄せください。
- ・会員のみなさんも、「読者の声」や近況そしてご意見をメールやFAXでお寄せ下さい。
- ・会報は、海外の派遣先でも読んでいただけるようホームページにのせさせていただきます。



食事のお誘い

現地人と仲良くなるため一緒に食事をするのは、1つの方法。ベナンでは自分から相手を食事に誘ったら、おごるのがマナーです。割り勘なんてしませんし、気を遣って支払おうとすると、このお金はなに？とカンカンに怒られます。誘った方が相手に対して「一緒に時間を過ごしてくれてありがとう」と感謝の気持ちをしめすためなのでしょう。反対に、食事に誘われて断るのはとても失礼な行為。あなたと一緒にご飯を食べたくない、と言っているようなものなのです。



お葬式でのスナップ

あいさつの文化

ベナンでは、あいさつをととても大切にします。ご近所さんと毎朝あいさつするのは当たり前。3日以上あっていない友達に電話するのは、友情を表す思いやりある行為とみなされます。着任当時1人1人と丁寧にあいさつをしていたら、100m歩くのに20分かかってしまいました。案の定、職場に遅刻してしまいましたが、同僚に理由を説明したら「仕方ないね」と理解してくれました。ベナンならではですね。

何かあったらすぐに会いに行ける距離で人々が生活しているベナン。そんな人々の関係を支えているのは、このように他者とのあいさつや食事を大切にす文化なのかなあと感じています。

(2013/9/30)

■内藤俊輔 (三郷市)

24年度 4次隊 ルワンダ 村落開発普及員

日本とルワンダの文化の違い

食生活の違い (外食)

ルワンダでの外食の基本スタイルはビュッフェです。

日本でビュッフェというと何回も取る事が出来ますが、ルワンダでは1回のみ。しかもお皿も一皿、そこにルワンダの主食である豆、バナナ、米、肉、そしてデザートなどを一緒に乗せます。

(写真は控え目ですが、ルワンダの人はこの倍以上盛ります)



味付けは美味しいですが、どこのお店もほぼ同じ物しかないので、多食な日本人には飽きやすいかもしれません。

交通手段の違い

ルワンダの主な交通手段はバスとバイクタクシーです。

自分が最初に驚いたのはバス。日本のバスのイメージとは大分違ういわゆる「ハイエース」で

す。そこにパンパンに人が詰め込まれるまで入り、各バス停へと行きます。本当に混んでいる時は自分の膝の上までルワンダ人が乗ってきてくる事も。



荷物の持ち方の違い

ルワンダ人は大抵の物を頭に乗っけて運びます。自分も下調べしていたので、驚かないかと思っていたのですが、写真のようにどうやって頭



に乗せたの？と突っ込みたくなるようなものまで乗せて運んでいます。女性は果物や食べ物、男性はマットレスから10キロのお米を何袋も担いだりします。

(2013/9/16)

■唐川史子 (三郷市)

24年度 3次隊 モロッコ 水泳指導

太陽の没する大地より

みなさん、こんにちは。モロッコで水泳指導をしている唐川です。

今年は、真夏の暑い時期に、約一ヶ月間にわたるラマダン(断食)があり、それが過ぎ、涼しくなったと思ったら、あっという間にモロッコに来て任期の3分の1を迎えてしまいました。そんな中で、今回は行事、食べ物についてお送りします。

まずは現在楽しみにしているお祭りについて。モロッコでは、全国民が休むイスラム最大のお祭り、羊犠牲祭(ライード)が控えています。名前の通り、イスラム教の神アッラーに各家庭1頭(家庭により2~3頭)の羊を捧げ、神への忠誠

を誓う行事であるとのこと。どの家庭も羊を購入するため、この時期、羊の値段が高騰しているようです。今の時期は、おしゃべり好きなモロッコ人が話す話題は、もっぱら羊、羊、羊。ライド日程は10月16日の予想ですが、新月を観測して決定し、前日にテレビ等で明日がライドになりますと伝えられるようです。ライドを挟む数日間から数週間は、みんな帰郷し家族と時間を過ごす、日本で言うお正月とのこと。公共交通機関は大混雑。私は、数週間後にあるこのお祭りを楽しみにしています。次回にはこのお祭りを詳しく報告出来るようにしたいと思います。

最後に、最近食べたユニークな食べ物、ラクダバーガーについて。



ラクダバーガーのお店で



日本では、絶対食べる機会がないだろうな・・・と思うラクダバーガー。砂漠がある国ならではのよね。とっても、おしゃれなカフェでおしゃれに盛り付けられて出てきたラクダバーガー。いざ食べてみると・・・肉厚なお肉は、弾力と噛みごたえがあり、美味しい!!! 決してジューシーな肉汁が出てくるというお肉ではないのですが、噛めば噛むほど味が出る。一緒に食べた隊員も美味しい!! とみんなが、美味しく頂きました。ちなみに、ラクダのミルクというのもモロッコのスーパーでは、見かけます。味は若干酸っぱく牛乳を飲みなれている私には違和感がありましたが、値段も高いのに、好んで買うモロッコ人もいます。

(2013/10/1)

■水谷元彦（所沢市）

25年度1次隊 ウガンダ 理数科教師

「まさか!?! の日々 in MASAKA」

埼玉の皆さん、こんにちは。私がアフリカのウガンダに来てから、約3ヶ月が経ちました。私はマサカという場所で活動しています。このマサカという地名、日本語で読むと奇妙に思えますが、ウガンダには他にも、ジンジャやトロロといった地名もあります。



ウガンダの定番の食事「ウガメシ」

ウガンダの生活について紹介します。まず食事ですが、主食はマトケとポショです。マトケは青いバナナから、ポショはトウモロコシの粉から作ります。私は配属先の学校給食で、マトケ・ポショ・豆を煮たものを毎日食べています。少しクセがありますが、慣れてくるとその美味しさも分かってきます。

穴のトイレも最初は驚きでした。洗濯は手洗い、シャワー無し、頻繁に停電・断水など、不便なこともあります。生活は慣れるものです。

ウガンダでは、マタツという相乗りタクシーが重要な交通手段です。ワゴンサイズの車に、同じ方面に向かう人々が一緒に乗ります。出発時刻は



首都カンパラのタクシーパーク（たくさん並んでいるのがマタツ）

決まっていなくて、人がいっぱいになったら出発します。なお、ウガンダで走っている車の殆どが日本車です。日本の技術は、アフリカの社会も支えています。

マタツの出発時刻のように、ウガンダでは時間の感覚がゆったりしているので、それにいつも戸惑います。学校での活動でも、時間の感覚の違いから、こちらが思ったように進められなくて悩んだりもします。

ただ、ウガンダの人々は親切で、こちらが悩んでいたりとすると手助けをしてくれます。分からないことは何でも教えてくれます。そうした人々に支えられながら、私は元気に活動しています。

(2013/10/1)

■関 美奈子 (さいたま市)

25年1次隊 グアテマラ 栄養士

私の任地はグアテマラの西部トトニカパン県モステナンゴ市という標高2500mの高地寒冷気候の村です。グアテマラは日本に比べると国土も人口も小さい国なのですが、場所によって気候、生活風習、言葉などが違うので驚きます。マヤの原住民が今もなおそれぞれの言語を持ち、それぞれ柄の違った民族衣装をまとい、手作業の多い原始的な生活を営んでいます。

兄弟の人数も多く、10人兄弟も珍しくはありません。大家族での生活はいつもおしゃべりが絶えず、とても賑やかで楽しいです。私のホームステイ先でも3世代13人が同居しています。犬10匹、猫2匹の他、豚、羊、鶏、兎などの家畜も敷地内で動き回っています。部屋の目の前には川が流れ、毎日洗濯をする女性や子どもがたくさんいます。



小学校で「野菜をたくさん食べよう」講座

私の仕事は栄養失調児の多い近隣小学校7校を巡回し、子ども・先生・保護者への食育講座、給食メニューの改善、料理指導などです。トウモロコシを練った主食は欠かせないので、煮豆を頻繁に食べます。情報不足や貧困でたんぱく質不足やビタミン・ミネラル不足の食生活が問題となっています。野菜を食べない食事が何日も続き

ます。



給食の1例：野菜と鶏肉の焼きそば、トルティージャ、大豆たんぱく粉ミルクの栄養ドリンク

マヤ系の人々は中米ラテン人特有の桁外れな面白いノリはなく、黒髪・顔や性格が日本人と似ているところがあり、親しみやすいです。日本人からするとパッチリ二重がうらやましいのですが、私の顔を見て奥二重のその小さな目と交換したい！とよく言われます。無いものねだりは、全世界共通なのですね！

(2013/9/21)

■田中康予 (熊谷市)

24年度1次隊 パラグアイ

日系日本語学校教師

パラグアイ便り

日本から飛行機で36時間。へとへとになりながらパラグアイに着いて2カ月が過ぎました。発見の毎日です。最近日本でも人気があるマテ茶はパラグアイでは大切な飲み物です。寒いときは温かいマテを飲み、暑いときは冷たいテレレというお茶を飲みます。ひとつのコップをみんなで回し飲みするのが習慣です。いっしょにお茶を飲みながらのんびり話すことで仲が深まるそうです。



日本から見て地球の反対側にあるここパラグアイには約7000人の日系人の方々が住んでいます。日本から遠く離れたパラグアイには今も豊かな日本語や日本文化が残っていて、びっくりする毎日です。日系人の方のお宅におじゃますると、おにぎりにつけもの、それに大福まで出てきて、ここは日本なんじゃないかと錯覚するくらいです。私の任地ラ・コルメナは77年前に初めて日



本人が移住した町です。ここを移住地にする決めのひとつは、景色が日本に似ているからだと言われている。緑豊かで日本の富士山に似ている山が見え、ここでは「コルメナ富士」と呼ばれています。日系人の名前のついた公園や通りもあります。きっとパラグアイで移住者の果たしてきた功績が大きい証拠だと思います。パラグアイに日系人が住んでいることを私は JICA ボランティアの試験を受けるまで知りませんでした。もっとたくさんの日本の方々にこのことを知って興味を持ってもらいたいなと思っています。

(2013/10/1)

■川上千恵子（行田市）

24 年度 1 次隊 ブラジル 日本語教育

日系社会支援シニア・ボランティア

アマゾン河口の街に広がる日系社会

パラ州ベレン市、聞きなれない地名であると思う。パラ州はブラジル北部にあり、国内最大級の面積を持つ州の一つである。州都であるベレン市はアマゾン河口に位置し、人口 100 万人以上の大都市だ。

アマゾンへの移住は 1929 年、パラ州アカラ地域（現在のトメアスー）に 43 家族 189 人が入植し移住が始まる。しかしそれ以前、1900 年初頭ペルーからの脱耕者がアンデスを徒歩で越え、ブラジル領アマゾンへ入ってきている。過酷な環境に耐え、風土病にも負けず、戦争を乗り越え、主要作物の病害による生産激減のための不況も経験し、2009 年、アマゾン移住 80 周年を迎えた。現在日系人はベレン市内には約 4,000 人、パラ州内だと約 3 万人、北伯地域（ブラジル北部）を見ると約 5 万人にもなる。その移住者や日系人を束ねる日系人連合会の本部組織として汎アマゾニア日伯協会がある。1958 年（昭和 33 年）に創立したそうだ。敷地の入り口には赤い大きな鳥居が立っている。アマゾン移住 80 周年を記念して建てられたものだ。

下部団体である北伯日本語普及センターの役割は名称にもなっているとおり「日本語の普及」だ。センターの会員になっている日本語学校 10 校への支援が主な仕事である。各種教材等を提供したり、先生方向けの研修会を定期的に行ったり、日本語教師になるための教師養成講座を行ったりしている。また、作文コンクール等も行っている。

日本語学習者のほとんどはブラジル人だ。ほとんどの人がアニメやゲームが好きで、それをきっかけに日本文化や日本語に興味を持った方々だ。また、日本へ留学したいと思っている学生もいるし、日本の企業で働きたいと思っている方もいる。しかし、残念ながらベレンには現在日系企業はない。ここで日本語を勉強して、サンパウロやマナウスへ行ってしまおう若い人もいます。



汎アマゾニア日伯協会前

日系人の学習者、2 世や 3 世の方々の母語はポルトガル語だ。家の中で日本語を話しているという家庭もあるようだが、その他は全てポルトガル語なので日本語は少しは話せるが、読んだり書いたりすることはできないという方々は少なくない。

(2013/10/1)

■四阿秀雄（あずま ひでお 富士見市）

24 年度 3 次隊 ウルグアイ 合気道

ウルグアイ便り

今年 1 月 9 日、シニア海外ボランティアとして家内随伴で南米ウルグアイに赴任しました。ウルグアイは日本とはちょうど地球の反対側になり、ブラジルとアルゼンチンに挟まれ、大西洋に面する小国です。人口は 340 万人ですが、GDP は南米トップクラスです。スペイン・イタリア系移民が主で、日系人は約 300 人にすぎず、英語も日本語も通じません。

ウルグアイには青年海外協力隊員は派遣されておらず、シニアボランティアのみ 10 人ほどで



す。職種はさまざまですが、最近は文化・武道に重点がおかれています。求める水準は高く、初めての要請だった合気道は6段以上が条件でした。

ブラジルは格闘技が盛んなことで知られていますが、ウルグアイ人も武術、とりわけ日本武道が好きなようで、空手、柔道、合気道、剣道の道場がいたる所にあります。合気道はとりわけ盛んで、私が所属するウルグアイ合気道連盟の傘下だけで12か所の道場があります（大半は首都モンテビデオ市内）。子供のころから始めた人も多く、合気道歴20～30年の有段者も少なくありません。

南半球なので赴任時は真夏で、ビーチには人があふれていました。4月に入ると街路樹が色づき、5月は大河ラ・プラタで発生する川霧がモンテビデオ市街に立ち籠め、7月は真冬入りで、雪こそ降らないものの、曇天・雨の日が続き、風もあります。8月にはさらに冷え込むとのこと。

コンクリート造りの家は薪の暖炉を備えていますが、暖房が切れると、底冷えの寒気が入り込みます。寒く湿った冬のため、リウマチを患う人が多いようです。

任務のほうは、1月に要請・受け入れ機関であるウルグアイ合気道連盟幹部との初会合、以後、市内道場の視察、連盟内道場合同稽古などの準備段階を経て、定期的な活動に入りました。①連盟傘下の道場への巡回指導 ②有段者稽古 ③公開稽古 ④地方都市への出張稽古と普及 ⑤その他セミナー・イベントへの参加 おおむね週4日のペースになります。

どの道場も受け身・基本をきちんと稽古し、礼儀、初心者への配慮も身につけています。多少気になる癖もありますが、まずは観察したいです。

(2013/8/30)

■内田一史（羽生市）

24年度3次隊 カンボジア 診療放射線技師
カンボジアの病院では

私が活動するコンポンチャム州立病院はODA日本支援により充実した医療機器が導入されています。その中の一つの超音波検査は、被曝をしないので患者さんの身体にも優しい検査ができることやメンテナンスの維持費がかからないということから、現在では幅広い検査領域をもつといった利点があります。

超音波検査の開発途上国での普及の必要性は重要な事から現在、X線撮影技術・超音波検査で不可欠な解剖学から技術・管理までのプログラムを考え、現地スタッフと一緒に勉強会や定期的にミーティングを行っています。また、信頼関係を築きながら楽しく現地スタッフたちと共に成長できたらと考えています。何事も地道に行うことが大事であり、カンボジア医療に小さな事でも携われるよう努めています。



任地のコンボンチャム州

私が住むコンボンチャム州はプノンペンから約3時間でカンボジア内、最大の人口の州です。路上の市場には新鮮な果物や野菜が豊富で、街には日本支援によるキズナ橋の下をメコン川が流れています。夕方になると川沿いには人が集まってきます。そこで現地の方・外国人の方と会話しながらコミュニケーションをとったりと住みやすい環境の下で生活しています。また、メコン川を眺めながらコーヒーを飲む事が日課で私の幸せのひとつです。カンボジアで一番のお気に入りの街が私の住むコンボンチャムです。

最後に

今日では、『医療』の現場は日進月歩で進化を遂げています。カンボジアの医療も同様です。残り約1年半のボランティア活動では、現地スタッフ・JICAの方々・他の団体の方々と連携を取りカンボジアの『安全で優しい医療』が実現できるきっかけが作れたらと思っています。

(2013/9/30)

■新井悠平（深谷市）

24年度4次隊 ネパール 農業協同組合

ナマステ〜っという言葉は誰でも一度は聞いた言葉ではあると思いますが。

ほとんどの人がインドの挨拶って思っているのではないのでしょうか？さてそんな大国インドとこれまた大国中国に挟まれた小さな小さな「ネパール」もナマステの国なんです。小さな国の国民の大きな誇りが世界一の山を抱えるヒマラヤ山脈。そんな雄大なヒマラヤ山脈を望める山岳地帯に私の任地があります。



私の仕事は小さな組合の活性化。オフィスにいる事もありますが、日々山を歩きながら、農家の方達とどうしたら組合がよくなるのか一緒に模索中です。ネパールに来て約半年が経ち、右手でご飯をたべるのも、左手でお尻を拭くのも、渋滞の道路に牛がいるのも、屋根にまで人をぎゅうぎゅうに乗せて山道を走るバスにも、その他多くの驚きに少しずつ慣れてきました。



ネパールに来てから日本の当り前は当たり前ではないんだと強く感じます。ネパールには100を超える民族、多言語、が存在します。

さらに標高は海拔数十メートル〜エベレストまで。場所によって人々の生活、言語、習慣、さらには動物、生態系などまったく異なります。一つ

の国でこれだけ変化に富んだ国は世界中に探してもなかなか見つからないでしょう。

違いに富んだこの国で日々爽快な衝撃を受けながら楽しみながら毎日を送っています。

あと残り一年半、小さな事でも自分に出来る事を増やし、任地に還元していけたらと思います。

(2013/9/30)

■高井優美（さいたま市）

25年度1次隊 サモア 小学校教育

サモアの島から、こんにちは

Malo!（こんにちは） 私は今大洋州の小さな国サモアのサバイイ島で小学校の先生として活動しています。私が活動している小学校は3つの村から子どもが通ってきていて、全校児童は約200人、教員数は私も含め10人です。Year1~8まで学年があり、私はYear2~5で算数・Year6~8で理科を教えています。授業は午前中9時から11時、インターバルをはさんで12時から14時半までですが、時間割があってないようなもので、14時前に学校が終わってしまうことが多いです。

小学校では教科ごとにカリキュラムがあるだけで教科書はありません。教え方や教材は先生方に任されています。また、そのカリキュラムも今年から新しくなっていて、先生方は大変苦勞しています。クラスをまわっていると全ての学年で同じ



内容を教えていたり、教科によってはその先生の得意分野のみ教えていたりする現状で、まずは全体で新しいカリキュラムを理解することが必要だと感じています。

活動を始めて間もなく2ヶ月。最近嬉しかったことは、Community dayという日本で言う授業参観のようなもので子どもたちが「大きな栗の木の下で」と「幸せなら手を叩こう」を披露してくれたことです。サモアの人たちは歌や踊りが大好きです。日本の歌を少し教えたら1日でしかも振付付きで歌ってくれました。



まだまだ自分のできることが明確にならず、学校に行っては悩むことも多いですが、かわいい子どもたちから毎日元気とパワーをもらっています。
(2013/9/25)

★小さなハートプロジェクト

隊員支援のため3万円寄付

ーバレッセン村バトゥワ地区水道拡張プロジェクトー
申請者 23年度2次隊 カメルーン派遣

榎本 翼(さいたま市)

当該地域には、水道も井戸も無く、住民は湧き水で生活している。濾過や煮沸する事なく飲料水として使用するため、下痢等を起こす住民が多く、多いときには、年間十数人の子供が亡くなっている。水源が少ない当地域では、水汲みを担う女性や子供の労働負荷は高い。村のごく一部の地域では給水塔から引かれた水道があるが、資金不足により当地域へ水を届ける事が出来ていない。本プロジェクトでは、水道を当地域まで1.8km拡張し2カ所に給水設備を設置し、約50世帯1,000人の村人に対し、安全な水へのアクセスを改善すること。

当会では、常任理事会で諮り、事業費約17万円の一部として、隊員支援積立金から3万円を寄付致しました。

入会のご案内

当会では、随時会員を募集しております。ぜひお友達を紹介してください。申込書などは事務局までお気軽にお問合せください

【年会費】

- ①個人会員；一口 3,000 円
- ②団体会員；一口 10,000 円
- ③法人会員；一口 30,000 円
- ④ご寄付；大歓迎

■新会員のご紹介 (36号発行以降入会の方)

小久保 政 雄(川口市)
中 田 淑 子(越谷市)
玉 置 哲 夫(群馬県・太田市)
小久保 俊 明(熊谷市)

《お知らせ》

1 帰国隊員報告会の開催

日時：平成25年11月23日(土・祝)

午後2時から

場所：埼玉会館 3C 会議室(けやき)

帰国された隊員から任地での貴重な体験談を話していただきます。

会員以外の方も歓迎致します。お知り合いの方にお声がけ下さい。

2 留守家族連絡会の開催

日時：平成26年3月2日(日)

場所：大宮ソニックシティ (詳細は後日)

現在派遣されている隊員のご家族のために、隊員をサポートする制度などの説明や帰国したOBと懇談し、いろいろな情報を持ち帰って戴くため開催されます。

JICAが主催、協力隊OB会と当会が共催致します。

改めてJICAから通知されます。是非ご出席下さい。

■編集後記

「この号から会報の編集責任者になりました」と書ければよかったのですが、とんだ迷走を続けました。編集経験ありということで指名されたようですが、それは写植を切り貼りしていたアナログ編集の時代のこと。すべてパソコン経由で原稿を遣り取りする今の作業にはお手上げです。

「そんなこともわかっていなかったのか」と言われれば一言もありませんが、どさくさまぎれの中で引き受けてしまったのです。あげくは前任者を呼び戻してヤマ場の作業をお願いすることに。いやはや、次号はどうなりますやら。(山田 洋)

・発行：埼玉国際青年を育てる会

・編集：広報委員会

・事務局：さいたま市浦和区高砂4-11-17
(井上事務所内)

TEL 048-862-1234 FAX 048-862-1235

E-mail: inotai0430+skssk@gmail.com

・http://www.sodaterukai-saitama-jica.com